法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-02-05

聴き取りの効用，オーラル･ヒストリーの価値 ： 『同時性』と『現地性』

猪木，武徳 / INOKI，Takenori

(出版者 / Publisher)
法政大学経済学部学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
The Hosei University Economic Review / 経済志林
(巻 / Volume)
73
(号 / Number)
4
(開始ページ / Start Page)
551
(終了ページ / End Page)
565
(発行年 / Year)
2006-03-03
(URL)
https://doi.org/10.15002/00001968

聴き取りの効用，オーラル・ヒストリーの価値

――『同時性』と『現地性』――

猪　木　武　徳

1．はじめに

なぜこの分野への参入が少ないか

近年，労働研究の分野でフィールド・ワークを行なう若い研究者が減ってきたことが同業者の間で話題になる[1)]。なぜフィールド・リサーチは避けられる傾向にあるのか。その理由をまず考えてみたい。

近年の社会科学研究で用いられる一般的なメソッドは，数量化されたデータを用いて（もちろん質的データを１，ゼロで置き換えて数量化するという方法を含む），回帰分析等の推定（裏から見れば検定）を行ない，仮説をテストするという手法である。こうした数量解析や統計処理を中心とするエコノメトリック・メソッドと異なり，フィールド・リサーチによる研究にははっきりとした定形的な仮説検定のスタイルがない。したがって，研究論文としてまとめる際，プレゼンテーションに大きな困難が伴う。しかしエコノメトリック・メソッドは，推定すべき関係式をフォーミュレイトし，変数を適切なデータで代理させれば，あとは「偏りのない頑健」な推定値の得られる適切な推定方法を選ぶという作業が勝負どころと

1）そうした現状を意識してか，小池・洞口（2006）のように，様々な分野におけるフィールド・リサーチの重要性と面白さ，そして調査の手法とコツを解説する良書が出版されている。

なる。

それに対して，フィールド・リサーチには，そもそも設定された問い自体が直接的な数量化を拒むような性質のものが多い。したがって一般的な問いを，まず仮説の形にフォーミュレイトすることが大問題であるし，仮にその問いがフォーミュレイトできても，概念を変数に置き換えるに際して，どのような指標を用いるのが適切かを検討するのに時間がかかる。必要な conceptualization が難しいだけでなく，仮説を立て検定（testing）できるようにするための指標を開発することが容易ではない。要するに，フィールド・リサーチで探す問題の「答え方」には決まった「作法」が無く，論文として纏め上げられるような「形」ができるまでには，時間が相当かかるのが普通である[2)]。

なぜ必要か

しかし言うまでもなく，社会科学の対象となる諸々の問題はエコノメトリック・メソッドだけで答えが得られるものばかりではない。現実には，統計が使えない，あるいは量化できないタイプの重要な実証的問題が沢山存在する。また，数量的なデータや文献資料が利用できても，現実の慣行と，資料に書かれていることが異なるケースもある。特に文献資料には，概して制度の「理念」や設立目的のみが記されたものが多く，文書をそのまま実際の慣行と考えると大きな誤りを犯すことがある。

研究者が，関心を持つ問題の全貌をあらかじめ知悉していることはない。現実の（経済）活動と慣行を観察し，聴き取りをさせてもらい，時として参与を許されながら，生きた活動に接することによって初めて感知される問題も多い。したがって，新しい問題を理解し，その解決方法を探ろうとする場合，フィールドで発見的に（heuristic）に調べるという方法が

2）たとえば筆者の参加した Maurice, Inoki et al. (1988) は報告書にまとめるまでに約 7 年，小池－猪木（1987）は本として出版するまでほぼ 5 年かかった。筆者の「ノロサ」もあって，共同研究者に迷惑をかけたが，聴き取りの時間も含めて，この種の研究には概して時間がかかるのは事実である。

不可欠になる。これはいわゆる「アンケート調査」と呼ばれる手法と対極をなす。

「アンケート調査」は，研究者が設定した問いに答えてもらい，その回答結果を解析するわけであるが，問題がすでに「問い」のかたちで，研究者の知識と問題意識の枠内に「限定」されてしまっている。したがって，結果を集計して「やはりそうだった」，「予想通りだった」という理解だけに終わることが多い。たとえ予想と異なっていたからといって，新しい問いが生まれ，さらに情報が入ってくるということはない。つまり，研究者の認識と理解に新たな発見は無く，「確認する」という作業に留まりかねない。その意味では，研究は「アンケート」を実施した段階で基本的に終結しているともいえよう。それに対してフィールド・リサーチでは，試行錯誤の可能性が読み込まれており，聴き取りの過程で発見された事実によって新たに修正された仮説をテストするということが可能になる。

もちろん，フィールド・リサーチと一口に言っても多種多様で，その目的と密度により様々なタイプに分かれる。一応大きく三つに分けると次のようになろう。

1）国際比較を中心とした，大規模な聴き取りを行う共同研究。いくつかの「論文」と「本」にまとめあげることを目的とするもの。

2）（数量的分析のための）部分的仮説をテストするため，小規模な聴き取りを事前に行ない，問題意識に現実的な妥当性があるかどうかをチェックするための聴き取り調査。

3）計量研究・理論研究の前提として，予備的に行うもの。日本の学者と違い，欧米の理論経済学の創発的な研究を行う者にはこの種の調査を行うものが多い。（Bewley［1999］は最近の代表例）。その調査結果を独立の論文としてまとめるとは限らない。

次に少し具体的にフィールド・リサーチの進め方を整理してみよう。この点についてはすでに優れた「指南書」が書かれているので，記述は最小限にとどめる[3)]。

2．調査の進め方

そもそも自分が何を知ろうとしていたのかを予め書き留めておくことは重要だ。そのためにまず研究計画書を作成しなければならない。とにかく書いてみるということは，いかなる場合でも，自分の考えの浅さを知るために不可欠である。また一旦聴き取りをはじめると，出会った「事実」が面白くなり，どんどん本来の目標と別方向に好奇心が働き始め，自分がはじめに何を知ろうとしていたのか見失ってしまうことがある。そうした事態（混乱）を避けるためにも研究計画書は不可欠だ。さらに，研究費の申請の段階でも，聴き取りをお願いする際にも，その研究の趣旨・目的を理解してもらうために研究計画書は必要になる。テーマ・問題意識（何故この問題を取上げるか）から始まり，何を何によって説明しようとしているのかを事前に（共同研究の場合は，メンバーの間で）検討しておかなければならない。

次に重要なのは，従来の研究をおさえておくための文献のサーベイである。これまで何が，どこまで明らかにされているのかを知ることは，思考の節約のためにも，先人の研究へ「クレディット」を与えるためにも欠かせない。そして，先行研究のどこが問題か（不十分か），自分の研究が新しい何かを少しでも付け加えられるとすれば，どの点においてなのかを意識しておかねばなるまい。

3）代表的なものとして次のようなものがある。Sidney and Beatrice Webb, Methods of Social Study, (1932) A. M. Kelly, 1968，マックス・ヴェーバー（鼓肇雄訳）『工業労働調査論』日本労働協会，1975年，労働調査論研究会編『戦後日本の労働調査』東京大学出版会，1970，J. Victor Baldridage, *Sociology: A Critical Approach to Power, Conflict and Change*, Wiley 1975（アメリカ社会学会の学会としての倫理綱領が含まれている），佐藤郁哉『フィールドワーク―書をもって街へ出よう』新曜社，1992年，小池和男『聞きとりの作法』東洋経済新報社，2000年。

調査の仮説

研究計画書で中心部分をなすのは，おおまかな仮説の設定である。先に述べたように，フィールド・リサーチでは，エコノメトリック・スタディーと異なり，仮設検定が陽表的には行いにくいので，仮説をはっきりと自覚し，用意しておくことが重要になる。仮設の設定の次に求められるのは，概念（concept），指標（indicator）を開発する作業だ。この点については，労働経済の分野の具体例として小池［2000］が優れた解説（e.g. 技能の「広さ」と「深さ」）を与えているので，ここでは触れない。調査事項の設定に関しても同書にわかりやすく解説されている。

調査対象

次に問題になるのは，どこで誰に調査（聴き取り）をさせてもらうかということである。「サンプリング」ができるような自由で贅沢な立場にないことが多く，調査を「お願いする」だけであるが，誰にお願いするのかはやはりサンプリングの問題が含まれる。企業調査の場合を例に考えると，サンプリングの仕方はまさに調査の目的によるわけであるが，私の経験では「コネ」よりも「会社名鑑」（Directory）の類を使って正面からお願いする方が有効なことが多い。

「ワン・サンプル」からの聴き取りの結果を，何故一般的命題として述べることができるのか，という問題が常に存在する[4]。もちろん対象を1社にしぼるより，できれば同業・同規模の代表的企業として2～3社調べられるにこした事はない。（outlier の研究は別にして）平均的なものを見たい場合はなおさらである。例えば二国間の国際比較を行なう場合，二つの国の企業の技術・規模を固定するだけでいいのか，という問いがついて回る。日本側の企業としても，一つだけでは比較対象の候補としては不十

4）この点の議論は小池（2000）に詳しい。

分とも考えられる[5]。全ては「比較対象として適切か」という問題に収斂する。理想的には，同種の企業について軽い調査をしておくことは必要であろう。

依頼状

依頼状で，自分の調査の目的を明らかにし，自己紹介（C.V.）と自分の過去の論文を「研究計画書」に添付して送り，面談をお願いするわけであるが，以下の点には留意した方がよいと思う。依頼状の「名宛」は，「何々課御中」ではなく，必ず（とくに外国の場合）個人名を調べて記すことが重要である。「何々課御中」では，読まれないまま棄てられる恐れがあるからだ。

次に，誰と誰に，どれほどの時間，何を聴きたいかを簡単に，しかし具体的に示す。その際，誰がその問題を一番よく知っているのかに注意する必要がある。概して，職位が高くなるにつれて，フロントの状態や慣行についての情報の確度は落ちる。一番（加工されていない）生に近い情報を持つ人の話を聞くことが重要だからだ。また，最低どれくらい時間をとるのか，何回くらい訪問したいか（予定より長くなることが多いが）等について，おおよその見当を事前に知らせた方が先方も安心するであろう。

そして研究が最終段階にさしかかった段階で論文の原稿に誤りがないかを，活字にする前に企業の担当者に必ずチェックしてもらうことを事前に約束することも必要だ。

研究費（科学研究費，民間の研究奨励金など）の調達は，現実には最も重要な問題のひとつであるが，一般論は難しいのでここでは述べない。

聴き取りの進め方

先方から調査の許可が下りれば，聴き取りに入るわけであるが，その進

5）Bewley（1999）の議論が参考になる。

め方としては，次のような点に留意した方がよいと思う。

言うまでもないことであるが，時間の取り方に関しては，徹底して相手の都合に合わせることである。「教えて頂く」という立場を決して忘れてはならない。

そして聴き取りへの姿勢として，

1）調査対象企業の技術を勉強し，書かれた資料（e.g. 有価証券報告書，社史）などを徹底的に調べるという，事前の学習を最大限行っておくこと。

2）その企業の属する産業の歴史と現情を調べておくこと。

こちらが勉強不足であれば「そんなことも知らないのか」というようなニュアンスの答えが返ってくる。よく勉強していくと，「ああ，そこまで勉強したのか。じゃあ，まあこれをお話ししましょう」と，直接そういう表現はないにしても，雰囲気的にはそうした気持が伝わってくる。

また，

1）全体的な観察がまず大事でありかつ必要だと言うこと。例えばホワイトカラーの仕事や人材育成を調べるのであれば，

ⅰ）組織と生産システムの全体像

ⅱ）調査の対象としている部分の位置付け

ⅲ）ルーティンの仕事の分れ方

ⅳ）ノン・ルーティンの仕事の裁量権

等について，大まかなイメージを持つことが必要だ。

2）単純な具体的質問で事実を聞くことが大切であって，「どう思うか」，「どう解釈するか」と言う問は，データとしての信頼度が落ちる。

3）最初から全部知ろうとしない，という姿勢も大事だ。

4）できれば，同じ質問を別の人にも別の形で聴く（いわゆる“うら”をとる），

と言うことも留意すべきであろう。二，三人で聴き取りを一緒に行い，聴き取りのノートをあとで整理することも必要になる。その際，その日の聴き取りが終了した時点で，（記憶の薄れないうちに）メモを文章にしておくことが肝要だ。そしてその日のうちに清書したノートを，ティーム内で交換する[6]。

近年は性能のよい録音器具があり，相手の了解が得られれば，テープ・レコーダーを使うことが容易になった。しかし筆者は，本格的な聴き取りを一緒にさせて頂いた M.Maurice 氏[7]も小池和男氏もテープをあまり使用されなかったこともあり，テープを使わない方法を採ってきた。もっとも，次に述べる，オーラル・ヒストリーの聴き取りの場合には筆者も全面的にテープに頼った。

3．オーラル・ヒストリーの問題点

オーラル・ヒストリーと聴き取りはどう違うか。一つ明らかなことは，オーラル・ヒストリーは話し手に，過去の事柄を現場と離れたところで記憶に頼りながら語ってもらうという手法である。この種の聴き取りも重要な資料となるが，自ずと限界もある。筆者は，政策研究大学院 COE プロジェクト「オーラル・ヒストリー」に参加し，４つの聴き取りを行ったので[8]，この点について触れておきたい。

筆者は，オーラル・ヒストリーは，話を伺いながら，その語り手が生きた時代の全体的な雰囲気，同時代の空気を少しでも知るというのが最大の目的だと考える。従って，企業の聴き取り調査同様，誰にお願いをするのかということが，一つのポイントになる。先にも触れたように，例えば企

6）この点でも，小池和男氏は極めて丹念かつ正確で，筆者は怠慢ゆえに，恥ずかしい思いをしたことを思い出す。

7）Maurice, Inoki et al. (1988)

8）筆者が中心的な聴き手となって，次の四人の聴き取りをまとめた。守屋廉造（2002），宮田義二（2003），村田昭（2004），高畑敬一（2004）。

業内の仕事について，分業と協業の関係，昇進，選抜の過程などを研究する場合，誰に聴き取りを行うかは決定的に重要になる。一般に，高いポストの方は現場で何が起こっているかということに関しては，話が抽象的になる。

オーラル・ヒストリーでは，昔を振り返って，その時その場所にいなかった聴き手に対して，記憶を頼りに物事を語ってもらう。記憶の誤まりとか思い込みとか，微妙な問題はもちろんあるが，一番重要なのは，「聴き手の側の知識と理解のレベルが話の中に反映されてしまう」ということだ。前もって歴史やいろいろな技術的なことを勉強しておいて，質問はできるだけ具体的にする。そして時には無駄話と思えるようなことからも，意外な事実が「転がり出て来る」こともある。無駄話も時に大事な情報源となるのだ。

経済活動の聴き取りの場合，例えば直接生産部門の労働者の場合，機械の音がうるさい生産現場で行われるから，体力的にも二時間程度が限度になる。オーラル・ヒストリーの場合でも，だいたいオフィスで机を囲んで話を聴くが，メモをとっていなくても一回二時間が限度のようだ。

企業調査の聴き取りが，「生産現場で」「その時の」慣行を尋ねるのに対して，オーラル・ヒストリーは，「現場から離れたところで」「過去の」ことを，聴くという形を取る。従って「聴き取り」と一口に言っても，データの性格や資料の価値は異なってくる。この点について少し論じておこう。

「歴史資料としての価値」

日本中世史の泰斗林屋辰三郎氏は，「資料の価値というのは，『現地性』と『同時性』にある」と指摘されている。「現地性」というのは，その場所でその資料は書かれたかどうか，「同時性」というのは，その時に書かれているかどうか，ということだ。この点について氏の説明を引用する[9)]。

林屋……私は，常に，歴史資料は，「現地性」と「同時性」という二つの基準に照らされなければならないと考えます。文献ならば，それが，その場所で書かれたものかどうかということ，これが「現地性」です。そして，その時に書かれたものかどうかということ，これが「同時性」です。

このｘ軸とｙ軸の二つの軸で判定して，その基準に近づけば近づくほど，史料として価値が高いということです。

水谷　その点，考古学の史料というのは有利なわけですね。

林屋　そうです。その時，その場のものであるという点で史料価値が非常に高い。ところが，文献はまさにその点で弱いのです。

古代史の文献史料といえば，『古事記』や『日本書紀』があるでしょう。これらは，日本という広い意味での「現地性」を強く持っている。しかし，「同時性」という基準からすると，これらの完成されたのは八世紀です。まあ，六世紀ぐらいのところから信頼できるということですが，少なくとも「遠古代」に関しては，これらの「同時性」は非常に弱いといわねばなりません。

ところが，もう一つの『魏志』倭人伝はどうかというと，これは「同時性」はかなり価値が高いけれど，「現地性」はまったくだめなんです。たとえば，この中に倭国の風俗の記事がいろいろと出てくる。着物は一枚の布の真ん中に穴をあけたものに首を通して着るという「貫頭衣（かんとういい）」のこととか，倭の地には，牛儋（たん）馬・虎（とら）・豹（ひょう）・羊・鵲（かささぎ）がいないとかいう記事ですね。

そして，いちばん最後にきて，これらのことはみな，海南島の儋（たん）耳（じ），朱崖（しゅがい）と同じだと書かれていて，ぽんと話が日本からそれてしま

9）林屋辰三郎（構成：水谷慶一）「神と王の遍歴〈その一〉」『野性時代』1975年２月号，pp. 182-183。筆者はこの記事の所在を山本七平『日本はなぜ敗れるのか――敗因21ヵ条』（角川書店，2004年）で知った。

っている。結局これは，書いた人の頭の中に，海南島と倭とがだいたい同じ緯度だという考えがまずあって，それで話を進めてきただけのことですね。だから，海南島の風俗ではあっても，倭国の風俗ではないわけです。

『魏志』倭人伝とか『後漢書』というと，今は，文献として最高に信用が置かれていて，もっぱら，それだけで議論が進められてゆくという傾向がありますが，こういう，非「現地性」という盲点があって，片や，『古事記』や『日本書紀』には，非「同時性」という弱さがある。その両方をうまく操作して，その操作のしかたに考古学や民俗学の力を借りて，歴史家は「同時性」と同時に「現地性」をも満足するような史料を頭の中で作り出してゆかねばならない。

『魏志』倭人伝の語句をいくら詮索しても，それは『魏志』倭人伝の文献としての研究にはなるでしょうが，そのままそれが，日本の歴史を解明したことにはならない。それは，x 軸と y 軸の片一方の軸が欠けているからです。そこに，古代史の，特に私の言う「遠古代」史の総合性があって，よく，古代史は空想が許されて楽だとおっしゃるけれども，けっしてそんなものではありません。

この林屋氏の考えを文字通りに適用すると，オーラル・ヒストリーは歴史資料としては現地性と同時性がないということになる。しかし，この考えでオーラル・ヒストリーの歴史資料としての価値をトータルに否定することはない。

その理由のひとつは，政治家の日記と新聞の記事との相違にあると考えればよい。政治家の日記も新聞の記事も歴史研究に使われることがある。新聞よりも政治家の日記の方が価値があると考える専門家も多いだろう。日記を書くことは政治的な行為であることを，政治家は無意識ではあっても，知っているかもしれない。

政治家に公的な責任の意識があることは事実であろう。日記が公開されようがされまいが，いずれはわかることであるという「歴史の裁定」を求める姿勢だ。そのような責任感ゆえに，日記に嘘を書くと言うことは意外に少ないと筆者は考える。

この点はオーラル・ヒストリーの史料を，のちのちどういう形で使うのかという，「使い方」にも関係してくる。その使い方について，最低限のマニュアルみたいなものが必要となろう，

林屋辰三郎氏の基準からすると，オーラル・ヒストリーには独立した史料としての価値はないかもしれないが，補強資料としては十分に価値がある。さらに筆者は，そこにはもう少し積極的な意味があると思う。「このオーラル・ヒストリーの資料がこう言っているからこうだ」と直接証拠づけることは難しいかもしれないが，インタビューに答えた人々の責任感の中に，政治家が日記をつけるときの姿勢と似たものがあると感じるからだ。それを感じ取れるかどうか，そしてその語り手が生きた時代の雰囲気を知ることができるか否かという点が，オーラル・ヒストリーの成果や価値と関係してくるのだろう。

4．作法あるいは倫理的問題

最後に，聴き取り調査に付随する倫理的な問題について少し触れておきたい。まず第一は，調査結果の公表に関する問題である。これは個々の研究者と聴き取りに応じてくれた相手の方（あるいはその組織）との約束のあり方によるため，一般論は難しい。時には，約束をした相手と，公表時の担当者が替わったことによるトラブルもあろう。しかし一般に，「公表に関する約束」は，後日確認できる形にしておいた方がよい。いずれにしても公表用の原稿は，（誤りを訂正するうえでも）担当者に一度は目を通してもらうのが筋であろう。研究上知り得た，企業や聴き取りの相手の方の情報は，慎重に取り扱うべきことは改めて指摘するまでもない。

ティーム内での資料の使い方，発表後の資料の保存の仕方等についても，「共同研究」の場合十分な理解と合意が必要であろう。集めた資料を共同論文（書籍）として公刊した後は，自由に使うというのが相場ではなかろうか[10)]。

聴き取りの相手の方への感謝の表し方はいろいろ考えられるし，その形には個人的な好みもあろう。しかし一番重要なことは，よい研究論文に仕上げ，その成果を「付き合って」下さった方々へ謹呈することが，最高の感謝の表現になると考える。

5．研究例（労働の分野のみ）

筆者が調査で参考にした文献と，読者に参考になると思われる文献を以下に示しておく。（このノートの執筆に際して参考にした文献は全て脚注に示した。）

1）Dore, Ronald P. *British Factory, Japanese Factory*, University of California Press, 1973，山之内靖，永易浩一訳『イギリスの工場，日本の工場』筑摩書房，1987年。

2）小池和男『職場の労働組合と参加―労資関係の日米比較』東洋経済新報社，1977年。

3）小池和男，猪木武徳編『人材形成の国際比較―東南アジアと日本』東洋経済新報社，1987年。

4）Koike, Kazuo and Inoki, Takenori, *Skill Formation in Japan and Southeast Asia, University* of Tokyo Press, 1990.

5）日本労働研究機構『国際比較：大卒ホワイトカラーの人材開発・雇用システム―日，英，米，独の大企業（1）事例調査編，（2）アン

10）この点に関して，筆者が一緒に仕事をさせてもらった共同研究者は皆フェアで寛大であり，研究者の間でのトラブルが皆無であったことは幸せであった。

ケート調査編』日本労働研究機構，1997年，1998年。
6）司馬正次『労働の国際比較』東洋経済新報社，1974年。
7）Bewley, Truman F. *Why Wages Don't Fall During a Recession*, Harvard University Press, 1999.
8）M. Maurice, T. Inoki, et al. *Des Entreprises Françaises et Japonaises face à la Mécatronique*, L.E.S.T.-C.N.R.S. France, 1988.
9）中村圭介『日本の職場と生産システム』東京大学出版会，1996年。
10）仁田道夫『日本の労働者参加』東京大学出版会，1988年。
11）小池和男，猪木武徳編著『ホワイトカラーの人材形成―日英米独の比較』，東洋経済新報社，2002年。（英語版，Koike,Kazuo and Inoki, Takenori *College Graduates in Japanese Industries*, J.I.L. 2003）
12）中村圭介・石田光男編『ホワイトカラーの仕事と成果―人事管理のフロンティア』東洋経済新報社　2005年
13）小池和男・洞口治夫編『経営学のフィールド・リサーチ：「現場の達人」の実践的調査方法』日本経済新聞社　2006年
14）C.O.E. オーラル・政策研究プロジェクト『守屋廉造（元小松製作所）オーラル・ヒストリー』政策研究大学院大学　2002年８月
15）C.O.E. オーラル・政策研究プロジェクト『宮田義二オーラルヒストリー』政策研究大学院大学　2003年10月
16）C.O.E. オーラル・政策研究プロジェクト『村田昭（株式会社村田製作所　名誉会長）オーラル・ヒストリー』政策研究大学院大学　2004年６月
17）C.O.E. オーラル・政策研究プロジェクト『高畑敬一オーラルヒストリー』政策研究大学院大学　2004年10月

Utility of Field Research and Values of Oral History
—Contemporaneity and On-the-Spot Information —

Takenori INOKI

《Abstract》

The value of field research should be highly honored for collecting non-quantifiable information, which is just as important to social sciences as quantifiable data. As part of such field research, the author stresses the uniqueness of the "oral history" method of information gathering. Whereas the method lacks contemporaneousness and "on-the-spot"-ness, it nevertheless serves as the otherwise non-accessible source of precious information, which may clarify the social meaning of hard-fact data. Moreover, one may reasonably count on the relative accuracy of oral-history information, the author believes, since carefully selected interviewees are likely to be just as truthful as personal diaries normally are.